

自然との一体感の描写分析 — D. H. Lawrence および E. M. Forster の場合 —

Analysis of the Description of 'Oneness with Nature'
— Focusing on Some Texts by D. H. Lawrence and E. M. Forster —

林 正 雄
Masao HAYASHI

（平成16年9月29日受理）

ABSTRACT

Recently we read in the newspaper about horrible cases of young pupils abusing their friends. Something seems to have drastically changed in the consciousness of some pupils in elementary and secondary schools in Japan. Reports have them lacking in tenderness toward nature and the lives of other people.

As a member of the Faculty of Education, I understand the necessity of developing teachers who can nurture their students' complete interest in the nature around them. To cultivate interest in nature, I use texts describing the connection between trees and humans by D. H. Lawrence and E. M. Forster.

はじめに

最近、初等・中等学校の中で、これまでにない凄惨な事件が起き始めている。学生・児童の意識内容がこれまでに大きく変貌している。こうした事態に直面して、初等・中等教員養成大学における英米文学講読の授業はまったく無力であるのか、という疑問が浮かんできた。

学生・児童の意識を変革するためには、まず将来教員を目指す学生の意識の幅を広げる必要があるのではないか。自然との交感能力の意味を理解した教員を生み出すことができれば、何らかの変革につなげることができるのではないか。文学体験は人間意識の改革に大いに貢献することがある。

そのような思いを込めながら、本稿では、ローレンスの自然・宇宙と人間との関わりかたについての発言を基盤にして、内なる自然を取り戻すための、人間の自然に対する意識の変革について考えてゆきたい。

1. 『アメリカのパン神』（“Pan in America”）

「パン神」(Pan)とはギリシア神話の牧神のことで、山野の神、さらには牧畜の神として古くから

崇拜されていた。ときに「すべての」を意味する形容詞 pan と関連させて用いられる事もあるが、語源的には無関係である。

パンは、上半身が人の姿で、髭だらけの顔をして、山羊のような耳と角をもち、下半身は山羊の足に蹄がついている。手に杖を持ち、頭には松葉の冠をつけている。陽気で淫蕩なパンは、山野を自由に駆け巡り、ニンフたちと戯れる。夏の真昼時には木陰で眠るが、これを妨げられると怒りだし、人間と家畜をパニック panic に陥れる。ローマでは、ファウヌス (*Faunus*) またはシルバヌス (*Silvanus*) と同一視される。

『アメリカのパン神』の中でローレンスはアメリカ・インディアンの自然認識様式に思いを馳せながら、自らが樹木との間に生まれる交感状況を描き出そうとしている。極めて繊細な感受性が捉え得た、樹木と人間の交感の様態を描いたテキストを見て行きたい。

And we live beneath it, without noticing. Yet sometimes, when one suddenly looks far up and sees those wild doves there, or when one glances quickly at the inhuman-human hammering of a woodpecker, one realizes that the tree is asserting itself as much as I am. It gives out life, as I give out life. Our two lives meet and cross one another, unknowingly: the tree's life penetrates my life, and my life the tree's. We cannot live near one another, as we do, without affecting one another. (PH 25)¹

〈要 約〉

私達は特別その樹の存在に気づかないで日々の生活を送っている。しかし、何とはなしに樹の上を見上げてみるとそこには野バトが羽を休めており、啄木鳥が、あたかも人が槌を叩いているような、いや、やはり人の槌音ではないような音を立てている。その音を聞くにつけても、その樹は私と同じように自己主張しているのだと気付かされるのである。その樹は、私との間で、互いに命を吐き出している。私とその樹は互いに出会い、互いの中に入り込む。いつのまにか。樹の命は私の命の中に深く染み込んでゆく。同様に、私の命は樹の命の中に深く染み込んでゆく。

このようなテキストを、何度も読み返し、自分なりのリズムを作り上げながら、そして、ことばの持つ深い意味を探りながら味読し、音読してゆく経験を経た学生と、そうでない学生とでは、樹木に対する思い入れが決定的に相違してくるものである。文学によって伝えられる知は、生きている外界との温かな融合であり、親しい相互理解であり、親和感に包まれた認識である。

Yet what do we live for, except to live? Man has lived to conquer the phenomenal universe. To a great extent he has succeeded. With all the mechanism of the human world, man is to a great extent master of all life, and of most phenomena.

And what then? Once you have conquered a thing, you have lost it. Its real relation to you collapses.

A conquered world is no good to man. He sits stupefied with boredom upon his conquest.

We need the universe to live again, so that we can live with it. A conquered universe, a dead Pan, leaves us nothing to live with.

You have to abandon the conquest, before Pan will live again. You have to live to live, not to conquer. What's the good of conquering even the North Pole, if after the conquest you've

nothing left but an inert fact? Better leave it a mystery. (PH 29)

〈要約〉

人間は現象世界に君臨した。ほとんどの領域で成功した。人間が考え出したあらゆる手段を用いて、人間はすべての生物世界とほとんどの現象世界の頂点に立った。その結果どうなったか。あるものを征服してしまうと、そのものは失われてしまうものだ。そのものとの真の関係が崩壊してしまうのだ。征服された世界は人間にとって、ほとんど意味を持たない。退屈のあまり呆然として、征服したもののうえにへたり込んでしまう。宇宙とともに我々自身も生きるために、宇宙が再び生命を帯びることが必要になっている。征服されてしまった宇宙、すなわち死んだパン神は、われわれに生きるよすが（縁）を残さない。パン神が再び息を吹き返す前に、征服したものを放棄しなければならない。征服するために生きるのではなく、生きるために生きるべきなのである。北極点を征服した後で、生気を欠いたその事実しか残らないとしたら、征服したことに何の意味があるだろうか。そっとしておいたほうが良いのではないか。

現代の文明は自然と共存する道を取らずに、自然を征服し、利用する道を選んできた。しかし一旦何かを征服してしまうと、闘う相手が消滅し、張り合いを失ってしまう。自然破壊、自然搾取の動きは、科学技術の飛躍的な発達に伴って加速されてきたが、その動きの危険性を指摘する声は現実を変えるものとなっていない。それでは、自然と人間の共存が可能であった科学技術発達前の時代に逆戻りすることは可能であろうか。単純な先祖がえりは不可能なのである。今日の未開人は宇宙に対して、現代の文明人以上に機械的で、優しさを欠いている。

The savage, today, if you give him the chance, will become more mechanical and unloving than any civilized man. But civilized man, having conquered the universe, may as well leave off bossing it... Because, when all is said and done, life itself consists in a live relatedness between man and his universe: sun, moon, stars, earth, trees, flowers, birds, animals, men, everything — and not in a “conquest” of anything by anything. (PH 31)

生命は人間と人間を取り巻く宇宙（太陽、月、星、地球、樹木、花、鳥、獣、人、その他すべてのもの）との生きた関係の中にある。一者による他者の「征服」にあるのではない。生命は、自己と他の生命との関係の間に生まれるという。

宇宙を生かすも殺すも、われわれが自然をどのように受け止めるか、自然に対してどのような接し方をするのか、われわれが自然をどのように観念化するか、それにかかっている。

2. フォースターが描いた自然との一体感

ローレンスと親交のあったフォースターの自然描写には、ローレンスの自然観の影響が窺える。しかし二人の小説の作風は、大きく異なっている。次にフォースターの自然との一体感を描いたテキストを取り上げて、その違いを考えて行く。

2-1 『コロナスからの道』(“Road from Colonus”)

ルーカス氏とその娘エセルたちイギリス人の旅の一行は、コロナスからの旅の途中、乾燥地帯の一角に、緑で覆われた居酒屋(Khan)をみつける。そこにはプラタナスが群生しており、オアシスのよ

うな安らぎを与えている。焼け焦げた一本のプラタナスの巨木があり、空ろな樹幹からは泉が噴出し、幹の外側には祠が置かれ、灯りが燈され、ナイアッドとドライアッドの元々の祠を受け継いで、今はマリアが祭られている。

ナイアッドは川や泉の守護霊 (river-nymph) であり、美しい若い妖精と考えられていた。ドライアッドもまた若く美しい妖精で、樹木に宿る森の守護霊 (wood-nymph) である。樹幹から清水が噴出す不思議な泉にナイアッドとドライアッドが祭られることはまことに似つかわしい。しかし古代ギリシャの二柱の守護神を襲って、今やキリスト教のマリアが祭られている。

The country folk had paid to beauty and mystery such tribute as they could, for in the rind of the tree a shrine was cut, holding a lamp and a little picture of the Virgin, inheritor of the Naiad's and Dryad's joint abode.

マリアを通して、古代の神々が息づいている。マリアは清冽な泉と荘厳な樹木の統合神として祭られている、ということができる。

現代に生きるルーカス氏は、ギリシャの旅で、ギリシャの内部に息づく神々の世界を垣間見る。それはちょうど、この祠が象徴しているように、表面はマリアの祠であるものの、その実際の主は、マリアの背後に息づくナイアッドとドライアッドの世界なのである。

不思議な祠に対するルーカス氏の最初の反応は、私的所有欲に取り付かれた現代人の反応である。ルーカス氏の求める「自然との一体化」は、自然の私的所有を意味している。

'I never saw anything so marvelous before,' said Mr. Lucas. 'I could even step inside the trunk and see where the water comes from.'

For a moment he hesitated to violate the shrine. Then he remembered with a smile his own thought — 'the place shall be mine; I will enter it and possess it' — and leapt almost aggressively on to a stone within.

ルーカス氏は幹に身体を凭せ掛けて、目を閉じる。すると自分が海に浮かぶ泳者になったかのような気がして来る。海の荒波に逆らって目標を目指す泳者が力尽きたとき、なんのことはない、潮の流れがその目標に運んでくれることを知るのである。

His eyes closed, and he had the strange feeling of one who is moving, yet at peace — the feeling of the swimmer, who, after long struggling with chopping seas, finds that after all the tide will sweep him to his goal.

So he lay motionless, conscious only of the stream below his feet, and that all things were a stream, in which he was moving.

そのようにしてルーカス氏は、彼の想像を超える、ある不可解な存在が万象の中に行き渡り、すべてを嘉された事を知る。

これはルーカス氏にとっての、エピファニー体験であり、森羅万象すべてが喜びに溢れ、彼に微笑みかけている。ルーカス氏が体験した外界との一体感は、次のように描写されている。

He was aroused at last by a shock — the shock of an arrival perhaps, for when he opened his eyes, something unimagined, indefinable, had passed over all things, and made them intelligible and good.

There was meaning in the stoop of the old woman over her work, and in the quick motions of the little pig, and in her diminishing globe of wool. A young man came singing over the streams on a mule, and there was beauty in his pose and sincerity in his greeting. The sun made no accidental patterns upon the spreading roots of the trees, and there was intention in the nodding clumps of asphodel, and in the music of the water.

自分の仕事に打ち込む老婆のかがみ込んだ姿に、意味があった。子豚のすばやい動き、次第に小さくなってゆく毛糸玉にも意味があった。ラバに乗って陽気に歌を歌いながら、浅瀬を渡ってくる若者の姿が美しく、その挨拶に心のこもった誠意を感じることができた。木々の根張りに注がれる陽光の作り出す模様は単なる偶然ではなく、群生する水仙が風に踊る姿にも、小川のせせらぎにも摂理を読み取ることができた。

古代の神々の世界を垣間見たルーカス氏は、その世界に住みつづけようとするが、共に旅する娘のエセルの計らいで、強引に連れ戻される。ロンドンに戻ったルーカス氏は、隣の家から聞こえてくる騒音に愚痴を言いつづける厄介者の老人に戻っている。

ルーカス氏のエピファニー体験は瞬間的な輝きに過ぎない。それは、現代人に許される束の間の神秘体験である。フォスターが描く『コロナスからの道』が短編であることも手伝ってか、その登場人物を通して表出される自然との一体感は軽妙であるが、作品の主要なテーマとなっていない。

2-2 『眺めの良い部屋』 (“A Room with a View”)

自然から遊離してしまっていて、自然と一体になれない人物の典型例として、『眺めの良い部屋』の中には、セシルが登場する。個性化が進んだセシルは、批判精神が旺盛で、ハリー・オトウェイ卿やビーブ牧師、果てはルーシーの弟フレディーなど周囲の人間を、口を極めて貶し続ける。セシルは周囲の人々との連帯性を持たないと同時に、周囲の自然との交感能力に欠けている。セシル自身そのことをよく承知していて、その能力の欠如した生存様式を恥じている。その間の事情をフォスターは、次のように描いている。

“ I had got an idea — I dare say wrongly — that you feel more at home with me in a room.”

“ A room?” she echoed, hopelessly bewildered.

“ Yes. Or, at the most, in a garden, or on a road. Never in the real country like this.”

“ Oh, Cecil, whatever do you mean? I have never felt anything of the sort. You talk as if I was a kind of poetess sort of person.”

“ I don't know that you aren't. I connect you with a view — a certain type of view. Why shouldn't you connect me with a room?”

She reflected a moment, and then said, laughing:

“ Do you know that you're right? I do. I must be a poetess after all. When I think of you it's always as in a room. How funny!”

To her surprise, he seemed annoyed.
 “A drawing-room, pray? With no view?”
 “Yes, with no view, I fancy. Why not?”
 “I’d rather,” he said reproachfully, “that you connected me with the open air.” (RV 125)ⁱⁱ

自分が自然から遊離した人間であるかどうか確かめたくて、セシルは婚約者のルーシーに尋ねる。
 「私と一緒にいるとき、自然の中で一緒にいるときよりも、部屋の中で一緒にいるときのほうが、寛げるようですね。」

唐突な質問にルーシーは、正直に答える。

「そういえばそのとおりですね。おかしなことに、あなたのことを考えるときに、あなたはいつも部屋の中にいます。」

「しかも、窓からの眺めがない部屋にいるのです。」

セシルは、ルーシーの心の中で、自分自身と野外の風景が結びついていないことを知って失望を隠せない。

自然界との交感能力を失っているセシルは、自分の中に情熱を生み出す能力にも欠けている人間として描かれている。

“Lucy, I want to ask something of you that I have never asked before.”
 At the serious note in his voice she stepped frankly and kindly towards him.
 “What, Cecil?”
 “Hitherto never—not even that day on the lawn when you agreed to marry me—”
 He became self-conscious and kept glancing round to see if they were observed. His courage had gone.
 “Yes?”
 “Up to now I have never kissed you.”
 She was as scarlet as if he had put the thing most indelicately.
 “No—more you have,” she stammered.
 “Then I ask you—may I now?”
 “Of course, you may, Cecil. You might before. I can’t run at you, you know.”
 At that supreme moment he was conscious of nothing but absurdities. Her reply was inadequate. She gave such a business-like lift to her veil. As he approached her he found time to wish that he could recoil. As he touched her, his gold pince-nez became dislodged and was flattened between them. (RV 127)

セシルとルーシーのはじめての抱擁に情熱は感じられない。至上的体験であるべき瞬間に、彼が感じる事ができたのは、何かばかばかしい想いだけである。彼女は仕事をこなすかのような手つきでベールを持ち上げる。二人の顔の接触を妨げる単眼鏡は、視覚能力が弱り、本能の働きも衰退した現代人を象徴的に表現している。

Such was the embrace. He considered, with truth, that it had been a failure. Passion should

believe itself irresistible. It should forget civility and consideration and all the other curses of a refined nature. Above all, it should never ask for leave where there is a right of way. (RV 127)

それに続くナレイターのコメントは、小説家自身の感懐と考えられる。

「情熱はそれ自体が抑えがたいものであることを知るべきである。丁重さ、思いやり、その他の洗練された性質は、情熱とは無縁のものと知るべきだ。とりわけ、当然行動すべき時に、許可を得るような愚行を犯すべきではない。」

セシルは、パッションを内に秘めた行動が取れない冷静なジェントルマンとして、描かれているが、同時に外界との交感能力を欠いた、「眺めの無い部屋」として描かれている。

Why could he not do as any labourer or navvy — nay, as any young man behind the counter would have done? He recast the scene. Lucy was standing flower-like by the water, he rushed up and took her in his arms; she rebuked him, permitted him and revered him ever after for his manliness. For he believed that women revere men for their manliness. (RV 127)

3. 『虹』“The Rainbow” に描かれた月との一体感

ローレンスの『虹』は三代にわたる男女の関係について描いている。第三代目にはアーシュラとその恋人スクレベンスキーの関係が描かれている。2人はある夜、親戚の結婚式のパーティーに連れ立って出席する。月はまだ昇っておらず、周囲は闇で覆われ、熾火が周囲を赤々と照らし出している。闇の世界に入っていったアーシュラのなかで、昼間のものとは別様な意識状態が生み出される。

To Ursula it was wonderful. She felt she was a new being. The darkness seemed to breathe like the sides of some great beast, the haystacks loomed half-revealed, a crowd of them, a dark, fecund lair just behind.

Waves of delirious darkness ran through her soul. She wanted to let go. She wanted to reach and be amongst the flashing stars, she wanted to race with her feet and be beyond the confines of this earth. She was mad to be gone. It was as if a hound were straining on the leash, ready to hurl itself after a nameless quarry into the dark. And she was the quarry, and she was also the hound. The darkness was passionate and breathing with immense, unperceived heaving. It was waiting to receive her in her flight. And how could she start-and how could she let go? She must leap from the known into the unknown. Her feet and hands beat like a madness, her breast strained as if in bonds. (R 315-316)ⁱⁱⁱ

この描写において、闇は生き物として扱われている。これは、比喩的な表現に止まってはいない。ローレンスは文字通り、生き物としての闇を描いている。人間の感受性は時として、闇が生きていると感ずることが実際ある。生きている闇をどのように描いているか。ローレンスは、知性的判断ではなく、感性的な判断を描こうとしている。闇の世界の息遣いが何か大いなる獣のわき腹のように生々しく感じられる。背後に積み重なっている干草の山は、その闇の野獣の隠れ処である。物狂おしい闇の波動が彼女の魂に入り込んでくる。

彼女は煌く星座の中に参入し、自分自身の足でこの地上の制約から抜け出したいと願う。その激し

さは、あたかも皮紐に繋がれた獵犬が激しく、身も世もなく、もがいているようである。激しさのあまり、名付けられない獲物を求めて闇の中に飛び出してゆくかのようなようである。

彼女は獲物を求める獵犬であると同時に、獵犬に狙われている獲物でもある。彼女は闇を求めていると同時に、闇の世界も彼女を求めている。闇は熱情に満ちて途方もなく荒い息遣いをして彼女を待ち受けている。しかし彼女は、既知なる世界から未知なる世界へ飛躍する術を知らない。気が触れているかのように彼女の手足が震える。

われわれはこのような迫力のある文体に接するとき、強力に生み出されるイメージの圧力に息を呑む思いがする。月の光が作り出す、万物が融合した世界が、圧倒的な言語表現力で描き出される。

“The moon has risen,” said Anton, as the music ceased, and they found themselves suddenly stranded, like bits of jetsam on a shore. She turned, and saw a great white moon looking at her over the hill. And her breast opened to it, she was cleaved like a transparent jewel to its light. She stood filled with the full moon, offering herself. Her two breasts opened to make way for it, her body opened wide like a quivering anemone, a soft, dilated invitation touched by the moon. She wanted the moon to fill in to her, she wanted more, more communion with the moon, consummation. (R 317)

アントンは、月が出たことを知らせる。アーシュラが振り返って見上げると、白く大きな月が丘の上に昇って、彼女を見下ろしている。彼女は透明な宝石のように月に向かい、月の光を受け入れる。そして彼女は満月の月光に満たされて立ち尽くす。ここには宇宙的な交感が描かれている。アーシュラは満月に向かって感応している。恋人のスクレベンスキーは月に憧れるアーシュラを止めようと必死になり、月の光をアーシュラから遮断しようとして、彼女を外套で被う。

女性と月との感応関係を題材にした文学は、世界的な広がりを見せている。日本では『竹取物語』が同趣旨のテーマを扱っている。物語で「なよ竹のかぐや姫」は、5人の貴公子の求婚に難題を課して退け、帝（みかど）の求愛をも断って、八月十五夜、天人に迎えられて月の世界に昇天する。月が象徴する原理は多義的であり、簡単に規定することはできない。一般に女性原理を象徴するとされているが、上記の描写において月はアーシュラと感応する天球として、極めて男性的である。

古来の神話で月は、女性的であるばかりか男性的であったり、時には両性具有的であったりする。三日月が「太い角を備えたたくましく若い雄牛」に喩えられることもある。^{iv}

この場面における月の光は、周囲の人間関係の直感的把握をアーシュラにもたらしものであり、女性的な闇の世界における「自然の光」(*lumen naturale*)とみなす事ができる。宇宙にみなぎるアニミスティックな生命感覚に目覚めたアーシュラは、自己内部の女性原理を確立する。恋人のアントンは破壊される。月が持つ創造と破壊の両面の力が暗示される。

4. 『無意識の幻想』(“*Fantasia of the Unconscious*”)より

ローレンスはかつて、ドイツのバーデン地方にあるブラック・フォレストに分け入り、樹木の根元に座して、樹の生命に触れようと試みた体験を語る。

It's no good looking at a tree to know it. The only thing is to sit among the roots and nestle

against its strong trunk, and not bother. That's how I write all about these planes and plexuses — between the toes of a tree, forgetting myself against the great ankle of the trunk....

I come so well to understand tree-worship. All the old Aryans worshipped the tree. My ancestors. The tree of life. The tree of knowledge. (FU 38)^{*}

〈要約〉

樹を知るためには、それを眺めているだけでは役に立たない。唯一の方法は樹の根の間に腰を下ろし、その太い幹に寄り添ってじっとしていることである。そのようにして私は、層や叢について書き物をするのである—樹の爪先の間腰を下ろし樹の踝に凭れて我を忘れて。このようにしてローレンスは樹木崇拝の内実を理解できるようになった。古代アーリア民族が樹木を崇拝したように。生命の樹を、そして知恵の樹を。

A huge, plunging, tremendous soul. I would like to be a tree for a while. The great lust of roots. Root-lust. And no mind at all. He towers, and I sit and feel safe. I like to feel him towering round me. I used to be afraid. I used to fear their lust, their rushing black lust. But now I like it, I worship it. (FU 39)

ローレンスは、地下に根を張り、天上にのし上がろうとする樹木の魂に触れようとして大樹の元に身を置く。かつて原始人の大いなる敵と感じられた樹木は、いまではローレンスの唯一の避難所であり、力となっている。

5. 樹木崇拝

樹木崇拝とは、大木や老木など、特定の樹木を神聖視し、また礼拝の対象とすることである。

地中海地域には古来、カシの木が崇拝の対象となっていた。アテネ女神崇拝も、元来その崇拝の対象はカシであった。カシの樹はゼウス神とも関連付けられ、力を象徴するものと伝えられている。古代ケルト族のドルイド僧団は、宗教行事をカシの樹の森で行った。いまでも行われているクリスマス・ツリーやメイ・ポール (May-pole) の風習は、こうした聖樹崇拝に由来するといわれている。

樹木を崇拝する動機として考えられることは、樹木に神が降りる聖霊降臨説と樹木そのものが生命力に満ちているとする考えがある。樹木そのものに生命力を認める考え方は、病気を癒し、若さを取り戻す力を持つ「生命の樹」(the tree of life) の観念を生み出した。バイブルには、「いのちの木」と「善悪の知識の木」が言及されている。(創世記2章9節)

生命力をもつ樹を崇拝することは、樹木と人との間に神秘的なつながりを認めることを意味している。樹は、人間と同様に生命や靈魂をもち、感情も持つと考えられてくる。その結果、意味もなく木の枝を折り、樹を伐採することは戒められる。樹木崇拝は、汎(はん)生命観やアニミズムの考えに基づくものである。

ユダヤ・キリスト教的伝統のなかで、「生命の樹」は永遠の生命の象徴として神話的に物語られている。生命の樹の実を食べる者は永遠の命を得ることが出来るとされた。

蛇に姿を変えて忍び込んだ墮天使に唆されて禁断の知恵の樹の実を食べたアダムとイブは楽園から追放された。生命の樹は、もはや人間が近づくことのないように、神によって剣と炎で守られた。特定の樹木を生命力の源泉として崇拝する信仰や、豊饒・生産の象徴として樹木の図象を用いる現象は広く世界に流布している。エデンの園に置かれた生命の樹は、豊饒信仰を元にして作られたヘブライ

的神話と考えられる。

6. 『アポカリプス論』 (“Apocalypse”)

「アポカリプス」(Apocalypse) はギリシャ語の「アポカルプス」(apokalupsis) から派生した言葉であり、その動詞 apokaluptein (apo- = off: kaluptein- = cover) は「覆いを取り除く」という意味を持つ。英語の Revelation であり、「天啓」、「黙示」の意味を持つ。

この作品は、聖書の「黙示録」をローレンス風に解釈したものであるが、単なる解説書にとどまらず、ローレンス自身の黙示文学となっている。

ローレンスは、その類まれな強力な想像力によって、古代人の感覚意識のあり方を把握し、それを現代に取り入れようと試みている。

But on the other hand, we have not the faintest conception of the vast range that was covered by the ancient sense-consciousness. We have lost almost entirely the great and intricately developed sensual awareness, or sense-awareness, and sense-knowledge, of the ancients. It was a great depth of knowledge, of the ancients. It was a great depth of knowledge arrived at direct, by instinct and intuition, as we say, not by reason. It was a knowledge based not on words but on images. The abstraction was not into generalizations or into qualities, but into symbols. And the connection was not logical but emotional. (AP 40-41)^{vi}

ローレンスはここで、古代人に付与されていたという官能的知覚 (sensual awareness, or sense-awareness, and sense-knowledge, of the ancients) について言及している。それは理性によってではなく、本能と直感によって直接的に把握する計り知れない知識である。言葉ではなく、イメージに基づく知識であった。したがって、抽象化は一般論や、事物の性質を述べるのではなく、シンボル化であった。観念の結合方法は論理性によるものではなく、情緒的なものであった。古代人の官能的知覚をこのように見通した後でローレンスは、その感受能力を現代に甦らせようとする。

There is an eternal vital correspondence between our blood and the sun: there is an eternal vital correspondence between our nerves and the moon. If we get out of contact and harmony with the sun and moon, then both turn into great dragons of destruction against us. The sun is a great source of blood-vitality, it streams strength to us. But once we resist the sun, and say: It is a mere ball of gas! - then the very streaming vitality of sunshine turns into subtle disintegrative force in us, and undoes us. The same with the moon, the planets, the great stars. They are either our makers or our unmakers. There is no escape.

〈要 約〉

われわれの血と太陽の間には永遠の生命の照応関係がある。われわれの神経と月との間には永遠の生命の照応関係がある。もしわれわれが太陽と月との間の接触と調和から抜け出してしまふと、太陽と月はわれわれに対して大いなる破壊の竜王と化してしまふであろう。太陽は大いなる血の生命力の源であり、われわれに向かって力を流出する。しかしわれわれがひとたび太陽に反抗し、「太陽は単なるガス状の球体に過ぎない」と言うとき太陽光の流入する生命力は、われわれの中で狡猾な破壊力と変じ、われわれを破滅させる。このことは月でも、種々の惑星でも、大いなる恒星でも同じことである。

彼らはわれわれを創造する存在でもあり、破壊する存在になることもあるのだ。それから逃れる術は無い。

太陽や月に対するこのような思い入れは単なる詩的幻想ではなく、ローレンス自身の研ぎ澄まされた感性によって捉えられた真実なのである。太陽光が育む生命現象や月の光が人間に及ぼす種々の影響は、科学的にも立証済のことである。ローレンスの唱える世界では、太陽や月が人間的感情を持って人間と向き合っている。太陽や月などの人間に身近な天体は単なる物体では無い。想像力によって対象物質に生命を与えようとする人間的な感情移入でも無い。文字通り、人間と天球との間には、生きた交流があるのだとする。

We have lost the cosmos. The sun strengthens us no more, neither does the moon. In mystic language, the moon is black to us, and the sun is as sackcloth.

Now we have to get back the cosmos, and it can't be done by a trick. The great range of responses that have fallen dead in us have to come to life again. It has taken two thousand years to kill them. Who knows how long it will take to bring them to life? (AP 26)

〈要約〉

われわれは宇宙を失ってしまった。太陽も月ももはやわれわれに力を与えることを止めてしまった。象徴的な表現を用いれば、月は闇に覆われ、太陽も毛布に覆われた如くに光を発しない。(黙示録第6章12節参照のこと)

今やわれわれは、宇宙を取り戻さなければならないが、それはおざなりな彌縫策によって得るものではない。われわれの中で死に絶えた自然との交感能力を、再び甦らせなければならない。交感能力を失うのに2000年を要した。それを取り戻すのにどの位かかるかは、見通しも立たない。

When I hear modern people complain of being lonely then I know what has happened. They have lost the cosmos. — It is nothing human and personal that we are short of. What we lack is cosmic life, the sun in us and the moon in us. (AP 26)

〈要約〉

現代人が寂しさを訴えるのを聞くと、何が起きているのかを知る。彼らは宇宙を失ってしまったのだ。といっても、我々に足りないものは、人間的なものでもなければ、意識的個我的なものでもない。我々にかけているものは、我々の内なる太陽であり、内なる月なのだ。

We can't get the sun in us by lying naked like pigs on a beach. The very sun that is bronzing us is inwardly disintegrating us — as we know later. Process of metabolism.

We can only get the sun by a sort of worship: and the same with the moon. By going forth to worship the sun, worship that is felt in the blood. (AP 26)

〈要約〉

われわれは太陽を崇拝することにより、太陽を取り戻すことができる。月に付いても同様である。崇拝といっても、血が感じる崇拝心でなければならない。

「血が感じる崇拝心」とは、多少どぎつい表現であるが、どんな意味であろうか。それは、知性に

よって理解する崇拜心ではなく、感覚的に感じ取れる、自然の美しさを感嘆する気持ち、雄大な自然の中に身を置いたときに感じられる崇高感、人間の生存を可能なら占める周囲の環境に対する感謝の気持ち、と言い換える事ができるだろう。素朴な自然宗教感である。

ま と め

観念的生き物である人間は、観念によって支配されて思わぬ方向へ暴走する事がある。今日の見境のない自然破壊も、特定の観念によって生み出された結果と考えられる。この自然破壊は、内なる自然の破壊に通じているという点で、極めて憂慮すべきものと考えらるべきである。

自然に対する人間の観念は、ギリシャ文化とヘブライ文化とで大きな違いを見せる。ギリシャにおける自然（ピュシス）の概念は、きわめて広汎なもので、その概念の中に外的自然は言うに及ばず、人間、精神（靈魂）や神々をも含んでいた。ところで、ピタゴラスやアナクシマン드로スなどのギリシャの哲学者達は、「世界全体」をさして言うときに、「混沌」（カオス）に対して「秩序」を意味する「宇宙」（コスモス）を用いたが、このコスモスには秩序と均整の取れた世界に対する賞賛の念が込められていたという。

そこで、ギリシャの自然（宇宙）は、それ自体が秩序ある存在で、秩序を保ちながら成長・発展するものであると考えられた。人間も秩序ある自然の一部として、自然と同質の小宇宙（マイクロコスム）とされ、自然と人間との間のアナロジーが生まれた。

キリスト教では、世界（自然）は無から創造されたと考える。人は神の似姿にかたどられた理性的存在であり、外界の自然とは一線を画す高貴な存在となった。神、人間、自然のヒエラルキーが前提とされる中で、自然は人間に奉仕すべき存在とされた。神は人間の利益を計るべく宇宙（自然）の運行を支配し、それが神の摂理（providence）とされた。このような中世的世界観は、自らの意志のもとに成長・発展するとしたギリシャの自然観とは決定的に異なる自然観である。近世の世界観は中世の世界観との断絶などではなく、中世的世界観の方向付けを強力に推し進めるものであった。自然に対する人間の態度を考えるとときには、一般的に、上に述べた二種類の態度が語られる事が多い。

ローレンスが取り戻そうとしている人間と自然・宇宙との関係は、ギリシャ・ヘブライ以前の生きた自然・宇宙との関係である。極めて宗教的でありながら、神の概念を持たずに、外界との緊密な肉体的一体感（a close physical oneness）の中に生きていた古代社会における人間と自然・宇宙との関係である。

ローレンスの作品には、このような願望に基づいた自然・宇宙との関係が唐突に描かれる事があり、現代の科学的宇宙観を常識にする読者に戸惑いを与える事がある。本稿で取り上げた『虹』に登場するアーシュラの、月に対する官能的な描写がその一例である。

ところで現代の科学は、人間の五感による外界認識能力をはるかに超えて発展しつつあり、科学教育を受ける学童は知識と感覚の乖離に戸惑いながら、そのギャップを埋める方法は教えられない。

学童に接する機会の多い教員養成系大学に学ぶ学生に対して、周囲の自然に対する優しい思いやりの心を育てるための意識改革の手段として、文学の果たす役割は少なくないのである。

【文末脚注】

- i D.H. Lawrence, *Phoenix* (London: Heinemann, 1970), p.25. 以下の引用では、(PH 25) と示す。
- ii E. M. Forster, *A Room with a View* (London: Penguin Books Ltd, 2000), p.125. 以下の引用では (RV 125) と示す。
- iii D.H. Lawrence, *The Rainbow* (London: Heinemann, 1950), p.315 - 316. 以下の引用では、(R 315 - 316) と示す。
- iv E. ノイマン『女性の深層』紀伊国屋書店、1985年、85ページ。
- v D.H. Lawrence, *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious* (London: Heinemann, 1961), p.38. 以下の引用では、(FU 38) と示す。
- vi D.H. Lawrence, *Apocalypse* (London: Heinemann, 1972), pp.40 - 41. 以下の引用では、(AP 40 - 41) と示す。

【参考文献】

- 菊川忠雄 編訳『自然の哲学』御茶ノ水書房、1981
『小学館大百科辞典』小学館